

<論 文>

芸術家としての「漫画家」 ——1930年代中頃の葉浅予と『時代漫画』——

城 山 拓 也 *

“Cartoon writer” in the mid 1930s of China
Ye Qianyu and *Modern Sketch*

SHIROYAMA, Takuya

In the mid 1930s of China, the so-called “Cartoon” was a very comprehensive concept, not only did it refer to “cartoon” and “comic”, but also “sketch” in the art field. For example, Ye Qianyu successfully created the comic *Mr. Wang* and at the same time drew lots of sketches. This thesis explores how artistic value is derived from the sketches drawn by “Cartoon writers” like Ye through analyzing critics and data from magazines and pictorials at that time.

The 1930s can be considered as the flourishing period of “Cartoon” in China. During this period, the famous “Cartoon” magazine *Modern Sketch* was issued, the works of new “Cartoon writers” got published, connection was established among writers from different cities. In this historical context, Ye Qianyu began to get interested in sketching due to the influence of overseas writers and also his own Beijing trip. These “Cartoon writers”, artists of the new era, created different kinds of artwork one after another.

Keywords : 1930s, China, Cartoon, Ye Qianyu, *Modern Sketch*

キーワード : 1930年代、中国、漫画、葉浅予、『時代漫画』

* 立命館大学言語教育センター嘱託講師

はじめに

1930年代の中国において、「漫画」(Manhua)という言葉は、人物、社会を諷刺や滑稽の角度から描くカートゥーンやコミックだけでなく、美術の一分野でもあるスケッチをも内包する、幅広い概念を備えていた¹⁾。

中国では清末から、『点石斎画報』(1884～1898)を典型例として、画家が新聞、雑誌上で、人物、社会を描くことは少なくなかった²⁾。しかしながら、彼ら画家は、諷刺や滑稽に意識を払うことはあったものの、自分たちの絵そのものに自律的な価値を見ようとはしていなかったように思われる。こうした中で、1926年末、数名の画家が同人「漫画会」を結成し、自分たちを「漫画家」、新聞、雑誌上に発表する自分たちの絵を「漫画」と呼んで、社会にアピールし始める³⁾。1930年代になると、彼ら「漫画家」の描く人物、社会は、自律的な価値を備えるものとして、実際に当時の新聞、雑誌を席卷していく。

今日の中国漫画史において、彼ら「漫画家」の描く人物、社会については、すでに注目を集めている。特に、長編連載漫画「王先生」で有名な葉浅予(1907～1995)は、当時の「漫画家」の中でも、大量のスケッチを制作した人物として看過できない⁴⁾。彼は1920、30年代の上海において、「王先生」というコマ付き漫画を連載する一方で、1930年代中頃から北京、天津、南京などへ赴き、現地の人物、社会を大量に描いた。実際に、彼は自身の一連のスケッチを「速写」や「旅行漫画」と呼び、『浅予速写集』(独立出版社、1936年)と『旅行漫画』(上海雑誌公司、1936年)という二篇の画集を刊行している。

中国美術史の文脈においても、葉浅予の描くスケッチについては、すでに高い評価が確立している⁵⁾。例えば、李路明は「二十世紀中国のスケッチ」(『中国現代美術全集——速写』湖南省美術出版社、1998年)という文章において、「葉浅予は独学で成功した芸術家として、1935年にスケッチを始め、一生にわたって大量の作品を残した。同時に、スケッチの要素を積極的に水墨画に導入したため、極めて独自の水墨画芸術の風格を作り上げた」⁶⁾と述べている。ただし、「独学で成功した芸術家」や「極めて独自の水墨画芸術の風格を作り上げた」という言葉が見えるように、批評家、研究者は葉浅予のスケッチを、美術史の中の例外と位置づける傾向が強い。

ここで指摘したいのは、先行する批評、研究では、彼のような「漫画家」の描く絵が、なぜ価値を持ったのかを明らかにしていない点である。当時の「漫画家」の多くは、もともと中国画や西洋画の専門教育を受けておらず、またスケッチの基礎訓練も受けていない。しかしながら、1930年代当時であれ、また今日であれ、彼らの描く絵については、多くの批評家、研究者が、前提なしに高い芸術性を見出してきたのである。こうした問題を考えるためには、葉浅予の描くスケッチそのものの特質はもちろん、中国における「漫画家」、「漫画」の歴史的位位置についても考察を進めるべきであろう。

以上のような問題意識の下、本稿で行いたいのは、「漫画家」が1930年代の中国において、いかなる存在だったのかを検討することである。特に、1930年代中頃の葉浅予の創作活動と、当時を代表する漫画雑誌『時代漫画』（1934～1937）に注目して、「漫画家」の描く人物、社会に、当時の人々がなぜ、いかにして価値を見出していたのかを考察したい⁷⁾。中国における「漫画家」は、いかにして芸術家と見なされてきたのだろうか。本稿は、葉浅予のスケッチの持つ意味を再考することを通じて、中国における「漫画家」とは何かを考えるための端緒を開くことを目的とする。

一、1930年代中頃の葉浅予

まずは、葉浅予が1930年代中頃において、いかなる創作活動を行っていたのかを整理しておく。

先に述べたように、葉浅予は1920、30年代、すでに「王先生」の制作で成功を収めていた。彼ははじめ、1928年から1930年まで、「漫画会」編集の雑誌『上海漫画』で、連載漫画「王先生」（全100回）を発表していた。1930年には、グラフ雑誌『時代』において再び「王先生」（全77回）、1932年からは新聞『晨报』の副刊（特別欄）「図画晨报」において「王先生別伝」（全182回と特刊にて2回）と、二つの「王先生」を同時並行で連載している⁸⁾。さらに、1935年になると、魯少飛編集の雑誌『時代漫画』にて「王先生」⁹⁾、張光宇編集の『独立漫画』にて「小陳」を発表していた¹⁰⁾。本稿では、これら一連の「王先生」をめぐる作品群を、「王先生」シリーズと呼びたい。

1930年代中頃は、「王先生」シリーズの知名度が、ピークに達する時期に当たる。例えば、『時代漫画』では、見開きや、カラーページでの掲載が多く、特別扱いされていたことがうかがえる¹¹⁾。また、他の画家が「王小二の物語」というパロディを制作していたり¹²⁾、葉浅予自身も「こう言っても誰も信じないだろうな」というタイトルで、あえて絵の形を崩した形で「王先生」を描いたり¹³⁾と、遊戯性の強い試みも見ることができる。さらに、「王先生」をモデルとした小説が登場したり¹⁴⁾、実写映画になったりと¹⁵⁾、他のジャンルに王先生の登場人物が飛び出すこともあった。

この時期で見逃せないのは、一連の「王先生」シリーズに加えて、葉浅予が本格的にスケッチを発表していたことである。早い例では、『時代漫画』第18期の「古城拊掌集」を皮切りに、北京の人々を対象としたスケッチを不定期で発表している¹⁶⁾。『時代漫画』以外にも、『汗血週刊』という雑誌では、1935年12月7日第5巻第23期から1936年2月23日第6巻第8期まで、「旅行漫画」欄にスケッチを連載することにもなっている¹⁷⁾。先にも述べたように、彼の一連のスケッチは1936年、『旅行漫画』と『浅予速写集』という二篇の画集に結実することとなる。

それでは、「王先生」シリーズで成功を収めていたにもかかわらず、なぜ葉浅予はスケッチ

に関心を抱いたのだろうか。ここで、『旅行漫画』の「自序」を確認してみよう。

1933 年秋、メキシコの画家、コバルビアスが上海に来たときに、彼が世界旅行の途中で描いたスケッチを見た。そこで、私も国内旅行をする機会があったので、やってみようと思ったのだ。彼が去った後、人物スケッチを練習し始めた。その頃は、上海近隣で小さな旅行をする機会がたくさんあったため、鉛筆とスケッチブックを持って歩き回った。グラフィック雑誌を編集し、画債を返済するあいだに、気ままに絵を描いていたのだ。良し悪しは関係なく、いつもたくさん描いていた。

去年の春（訳注：1935 年の春）、北平への旅行計画が実現した。南方とはまったく異なる気候の下での生活が、津浦鉄道沿線に広がっていた。金鉦夫が大量の金鉦を探し当てたかのように、私はうれしくてたまらなかったものである。北平に着くと、天橋、廟会、街頭、それに胡同の路地裏、見えるものすべて、スケッチブックの虜となった。毎日平均一冊を費やし、ぜんぶで三十冊以上にもなった。もちろん、その中には形になっていないものも、たくさんあるのだけれども。¹⁸⁾

この記述から分かるのは、彼がスケッチに関心を抱いた理由の一つに、1933 年にコバルビアスというメキシコ人画家と出会ったこと。もう一つに、1935 年に北平（北京）へ旅行したことの二点を挙げていることである。

注目したいのは、葉浅予がこの「自序」において、画家としての自負を吐露しているように見える点である。例えば、「鉛筆とスケッチブックを持って」、「良し悪しは関係なく、いつもたくさん書いていた」などの記述からは、コバルビアスから表面的な絵の技巧ではなく、画家としてのあり方そのものに影響を受けていたことがうかがえる¹⁹⁾。さらに、「見えるものすべて、スケッチブックの虜となった。毎日平均一冊を費やし、ぜんぶで三十冊以上になった」という言葉からも、絵を描くことに対する愛着を見ることができるだろう。

それでは、なぜ彼は一人の画家に影響を受けたり、また旅行をしったりという理由で、スケッチの制作を持続させることができたのだろうか。それに、なぜ『時代漫画』や『汗血週刊』などの雑誌は、彼にスケッチの発表の場を与えたのだろうか。次に、コバルビアスとの出会いと、北平旅行がいかなる意味を備えていたのか、当時の雑誌、新聞に見える資料に基づいて考察を進めてみたい。

二、「漫画家」の描くスケッチ

1、ミゲル・コバルビアスからの影響

コバルビアスとは、メキシコ生まれの画家、ミゲル・コバルビアス（1904～1957、Miguel

Covarrubias) のことである。彼を葉浅予に紹介したのは、時代図書会社の経営者、邵洵美 (1906～1968) であった。

1930年代の邵洵美は、時代図書公司という出版社を立ち上げたり、『上海漫画』をグラフ雑誌『時代』(1929～1937)に吸収合併させたりするなど、「漫画」への関心を強める時期にあたる²⁰⁾。ミゲル・コバルビアスについても、アメリカのファッション雑誌『Vanity Fair』で活躍する画家として注目していたらしい²¹⁾。こうした中で、邵洵美は、コバルビアスの上海滞在を機に、「漫画会」のメンバーとの交流を促そうとしていたわけである。実際に、先行研究では、コバルビアスの絵が、特に張光宇 (1900～1965) の画風に大きな影響を与えたことを指摘している²²⁾。

コバルビアスが上海にやって来たのは、1933年9月末のことである。彼は、妻で写真家のローサとともにアジア各地を旅行しており、その一環として上海に滞在していた²³⁾。例えば、邵洵美は1933年、『十日談』第8期の「コバルビアス」というエッセイにおいて、コバルビアス本人の印象、彼らの会話の内容などとともに、「漫画会」のメンバーの前でスケッチする様子を詳細に記している²⁴⁾。葉浅予もまた、この会合を通じて、コバルビアスとの交流を深めたのであろう。

本稿で注目したいのは、邵洵美がコバルビアスの存在を、新しい時代の芸術家、「漫画家」のモデルと見なそうとしていた点である。

例えば、邵洵美は同年の1933年、『時代』第5巻第4期において、「コバルビアスとその妻」という比較的長いエッセイを書いている²⁵⁾。彼はこのエッセイにおいて、「漫画家は漫画に身をゆだねる以前に、感情豊かな人間であるものだ」と述べた上で、コバルビアスについて、次のように紹介している。

コバルビアスは1904年、メキシコで生まれた。彼は美術学校に入ったことがなく、その成功はまことに、自分の観察と練習で得たものに他ならない。彼は13、14才の頃から流浪生活を送り、芝居小屋の楽屋を寢床にして、若い芸術家や舞台上のピエロたちと交流した。こうした場所から、彼の将来の趨勢が分かるというものであろう。先に述べたように、漫画家は漫画に身をゆだねる以前に、感情豊かな人間であるものだ。もちろん彼も例外ではない。美術学校の仕事が、お決まりの奴隷を作ることしかしないことを見て、義憤に駆られた。そして、多くの青年画家とともに、現地の美術学校を打ち壊し、自由教育の住処へと変え、ディエゴ・リベラを彼らの友人であり、教師としたのである。²⁶⁾

この引用において、邵洵美はコバルビアスを、「美術学校」を出たアカデミズムの申し子ではなく、「自分の観察と練習」だけで成功した人物であることを強調している。彼にとって、「漫画家」とは、既存のアカデミズムを拒否するような、まったく新しい芸術を担う人物に他なら

なかった。

さらに注目したいのは、邵洵美の描く「漫画家」のあり方が、当時の「漫画会」のメンバーの境遇と、一致しているように思われる点である。葉浅予はもちろん、当時の「漫画会」同人の多くは、コバルビアスと同じく、美術学校に入ったことがなかった。彼らは、そのほとんどが素人同然で上海にやって来て、「自分の観察と練習」を通じて、「漫画」やファッションデザインを制作していたのである。このような状況の下、邵洵美が「漫画会」の立ち上げた『上海漫画』を、自らの発行する『時代』に吸収合併させていたことは興味深い。というのも、彼が『時代』を通じて「漫画会」に提供しようとしていたのは、美術学校ではなく、まったく新しい芸術を立ち上げる場であったように思われるからである。

こうして見ると、『旅行漫画』の「自序」に見える画家としての自負は、葉浅予自身の個人の性格のほか、邵洵美の金銭的、理論的な支持が背景にあったことが指摘できるだろう。葉浅予もまた、コバルビアスと同じように、「美術学校に入ったことがなく」、当時の「成功はまことに、自分の観察と練習で得たものに他ならぬ」かった。だからこそ、「鉛筆とスケッチブックを持って歩き回り」、「良し悪しは関係なく、数多く描く」ことに価値を見出すことができたのではないか。彼は、邵洵美の理解の下、まさに邵洵美の求める「漫画家」として振舞っていたわけである。

2、北平旅行

葉浅予の画家としての自負に、決定的な一打を与えたのが北平旅行であった。次に、当時の天津で出ていたグラフ雑誌『北洋画報』（1926～1937）を参照して、彼の北平旅行について検討を進めてみたい。なお、『北洋画報』は天津だけではなく、当時の華北地域において最も多くの発行数を誇る雑誌として、歴史的に重要な意味を備えている²⁷⁾。

さて、『北洋画報』からは、葉浅予の北平旅行に関して、具体的に述べた記事を四つ発見することができた²⁸⁾。以下に、記事に登場する時間、場所、人物について、簡単にまとめておく。

時間：1935年4月から6月

場所：恵中飯店、南開大学、落子館、三不管、中華茶園（以上、天津）。慶林春、英林珈琲館、天橋花市、中華公寓（以上、北平）。

人物：梁白波、宗維賡（以上、同伴者）。劉宝全（芸人）。王君異、蔣漢澄、譚旦厝、劉凌滄（以上、画家）。魏守忠、譚正曦、趙澄、張印泉（以上、写真家）。林仲易、李迺時（以上、新聞界）。董世錦、賈漢玉、蒯彥範、石曉暉（以上、社交界）。

以上からうかがえるのは、葉浅予が1935年の4月から6月と、比較的長い期間にわたって旅行をしていたこと。北平だけではなく、天津にも長く滞在していたこと。さらに、同伴者と

して、二番目の妻であり、同じく「漫画家」であった梁白波、それに友人で写真家の宗維賡を伴っていたことである。

中でも、無視できない特徴の一つだと思われるのは、彼の北平旅行が、かなり大きなニュースとなっていたことである。葉浅予の以前にも、1920年代には、同じ「漫画会」メンバーの魯少飛（1903～1995）が、北平、奉天に滞在し、『北遊漫画』（中国美術刊行社、1927年）という画集を刊行している。しかしながら、当時の魯少飛は「晨光美術会」という美術団体に属していたものの、いまだ知名度がなく、現地で大々的に歓迎されていた様子を見ることはできない²⁹⁾。その一方で、1935年の葉浅予の場合、記事に挙がっている名前を見てみると、画家、写真家はもちろん、新聞界の人間がいたり、それに社交界の人間がいたり、かなり豪勢に歓迎されていることが分かる。

もう一つの特徴は、葉浅予が北平や天津の人々の絵を描き、すでに発表までしていた点である。例えば、『北洋画報』を見てみると、1935年だけでも、葉浅予の署名で12点の作品を確認することができる。しかも、その12点のうち、すでに成功していた「王先生」の絵の7点を除く5点が、人物のスケッチであったことは無視できない³⁰⁾。というのも、こうした絵の存在からは、天津の『北洋画報』が「王先生」だけではなく、葉浅予の描く絵そのものに一定の価値を見出していたことを看取できるからである。おそらく、葉浅予自身もまた、自分の絵が影響力を備えていると実感したからこそ、スケッチを描き続けることができたのではないか。

以上のような状況に鑑みると、葉浅予のスケッチへの関心は、彼一人の個人的な体験や趣味だけではなく、1930年代中国における「漫画家」、「漫画」の発展と、深く関わっていることが分かる。一つは、葉浅予のような素人の絵描きが、「漫画家」として活躍できる場が、実際に立ち上がっていたこと。もう一つは、彼らの描く絵、「漫画」が、上海だけではなく、中国各地の人々に影響を与えるジャンルに成長していたことである。1930年代中頃の葉浅予は、「漫画家」や「漫画」を取り巻く状況を察知したために、新しい創作活動に関心を持つことができたように考えられるのである。

それでは、「漫画」や「漫画家」は1930年代の中国において、具体的に、いかにして知名度を獲得していたのだろうか。次に、当時の中国における代表的な漫画雑誌、『時代漫画』を中心に、検討を進めてみたい。

三、『時代漫画』をめぐる

1、「漫画」の名を冠する雑誌

はじめに述べたように、中国における「漫画」は、「漫画会」同人が1920年代末、『上海漫画』を通じてアピールした新しい概念であった。その「漫画会」メンバーは、1930年代中頃になると、改めて「漫画」の名を冠する雑誌を刊行している。管見の限り、「漫画」の名を冠する雑

誌の中で、「漫画会」直系のものには以下の四部がある³¹⁾。

- 1、魯少飛編『時代漫画』時代図書公司、1934年7月20日～1937年6月20日、全39期
- 2、王敦慶編『漫画界』時代美術社、1936年4月1日～1936年11月1日、全8期
- 3、張光宇編『独立漫画』独立出版社、1935年9月25日～1936年2月29日、全9期
- 4、上海漫画社編『上海漫画』独立出版社、1936年5月7日～1937年6月30日、全13期

魯少飛編集の『時代漫画』は、1930年代の漫画雑誌の中で、最も長く続いた雑誌である。月刊誌で毎月20日発行、每期35～50ページで、その内カラーページが4～8ページであった。『漫画界』は、『時代漫画』第26期を境に一時休刊した際に、王敦慶が編集長となって発行した雑誌である。体裁は『時代漫画』とほぼ同じで、重複している制作者も多い。

『独立漫画』は、張光宇、張正宇の兄弟が、時代図書公司を離脱し、新たに独立出版社を立ち上げて創刊した雑誌である。半月ごとの刊行で、每期35ページ前後であった。『上海漫画』は『独立漫画』休刊後に出た雑誌で、『独立漫画』とほぼ同じ体裁を備えている。1920年代に出た『上海漫画』と同じ雑誌名であるため、本稿では、この独立出版社版のものを『上海漫画（独立出版社版）』と記す。

すでに先行研究が指摘しているように、中国の1930年代中頃は、空前の雑誌刊行ブームが訪れる時期でもあった³²⁾。彼ら「漫画会」同人は、こうした社会的ブームの後押しを受けて、自分たちの絵を「漫画」というジャンルの表現として、中国社会に浸透させようとしたとも考えられる。中でも、『時代漫画』は当時の雑誌の中でも、印刷の質がよく、また刊行期も長かったため、広範囲に影響力を及ぼすことができた。

2、若手、中堅画家の取り込み

それでは、これらの雑誌には、いかなる人々が作品を発表していたのだろうか。本稿では、特にそれぞれの雑誌に見える作品数に注目して、整理しておきたい³³⁾。

試みに、『時代漫画』全39期において20作以上、『独立漫画』全9期と『上海漫画（独立出版社版）』全13期において、それぞれ10作以上の作品を発表している人物を抽出してみた。具体的に、表一「『時代漫画』、『独立漫画』、『上海漫画（独立出版社版）』に頻出する漫画家」にデータをまとめたので参照されたい。なお、整理の都合上、三誌ともに名前が頻出する人物に○を附している。

表一から分かるように、『時代漫画』、『独立漫画』、『上海漫画（独立出版社版）』では、1920年代の「漫画会」メンバーだけではなく、新しい画家もコンスタントに作品を発表している。

まず、当時の気鋭の新人として挙げておきたいのが、黄堯（1914～1987）である。彼は当時において、「牛鼻子」シリーズで人気を博しており、三誌すべてにほぼ毎期にわたって作品

表一 『時代漫画』、『独立漫画』、『上海漫画（独立出版社版）』に頻出する「漫画家」

雑誌名	名前
『時代漫画』	魯少飛、○黄堯、曹涵美、張文元、黄嘉音、張英超、葉浅予、胡考、○陳涓隱、陸志痒、○張樂平、華君武、沈逸千、陶謀基、宝宗洛、王敦慶（漫画理論）
『独立漫画』	翁伝慶、特偉、胡考、陳浩雄、丁深、○張樂平、張光宇、○黄堯、汪子美、金沫、華君武、○陳涓隱
『上海漫画（独立出版社版）』	艾中信、許若明、○黄堯、陳惠齡、汪子美、許超然、○張樂平、○陳涓隱、嚴折西、陳浩雄、廖冰兄、丁深、張文元、朱吾石、陳孝祚、張文元、張仃、曹涵美

を発表している。また、今日において著名な張樂平（1910～1992）も、この時期から「三毛」シリーズを制作しており、こちらも三誌にはほぼ毎期にわたって作品を発表している³⁴⁾。さらに、彼らはいずれも『時代漫画』などの雑誌において、「牛鼻子」や「三毛」のようなコマ付き漫画の他に、一コマ漫画やスケッチ風の絵なども制作していたことも指摘しておきたい。

他にも、『時代漫画』では、中堅の画家も数多く作品を発表している。例えば、陳涓隱（1897～1986）は、三誌すべてに名前が頻出する人物として、見過ごすことはできない。彼はもともと蘇州の美術団体「冷紅書画会」のメンバーであり、すでに相当のキャリアを積んでいた³⁵⁾。『時代漫画』は若手だけではなく、こうした中堅の画家のなど様々な人々の絵を、「漫画」として提示していたわけである³⁶⁾。

当然のことながら、黄堯や張樂平ら新人の画家であれ、陳涓隱のような中堅の画家であれ、それぞれ固有の画風を備えていることは言うまでもない。しかしながら、『時代漫画』、『独立漫画』、『上海漫画（独立出版社版）』といった雑誌が、彼らの作品をあくまでも「漫画」の表現として紹介しつづけていたことは重要である。というのも、こうした雑誌が目指していたのは、多種多様な画家の絵を集めることで、「漫画」というジャンルの正統性をアピールすることであったように思われるからである。

3、様々な地域の投稿者

『時代漫画』は上海において「漫画会」の立場を広げ、様々な画家を取り込もうとしていただけにとどまらない。『時代漫画』のより大きな特徴は、上海以外の地域の画家との間でネットワークを強化していた点にある。

例えば、『時代漫画』では、特に第16期から投稿者の名前とともに、滞在地を併記する傾向があった。表二『時代漫画』投稿者の滞在地』は、『時代漫画』において、その名前+地名を併記しているものを集計し、まとめたものである。なお、投稿者の中には、旅先で作品を制作している場合もあるため、示された地域がそのまま居住地になるとは限らない。また、同じ作者が異なる場所から投稿している場合もあるため、下線で重複を示すようにした。

表二 『時代漫画』 投稿者の滞在地

地域	名前（都市名）
綏遠	孫之攜（包頭）
天津	童漪珊、宝宗洛、姚一喃、金樹廷、李草陰、姚团絲、翁興慶、 <u>田無災</u> 、陳封雄、陳乃勇、唐葆華、宝宗淦、李里、蘇策、楊孚舜、周俊森、郭迪雲、張振潭、 <u>文俊森</u> 、嘉全、王朱、趙行道、徐靈、李淮、張振龍、鄭嘉全、 <u>殷世鏗</u> 、柳小沫、郁彥、顧一、達因、 <u>聞俊森</u> 、何紹君
北平	荆森、譚沫子、孫樹南、白旭、張振仕、劉連生、穆家麟、麦金葉、蘇策、陳封雄、林家春、唐秀梅、雲子、 <u>孔嘉</u> 、王城棣、礼拜牛、穆博宣
河北	王疇（勝芳県）毛雪樵（滿城）趙半昂（東鹿）門九敬（杷？郷）、鄧文光（河北） <u>孔嘉</u> （正定）、堯天（通県）、 <u>田無災</u> （唐山）、艾秋艾（深県）、馮合作（深県）、棣華（保定）、那迭雲（保定）、喬木（宣化）
河南	朱朗（開封）、汪羞佛（開封）、劉敦惡（開封）、 <u>孔嘉</u> （鄧県）、高珍（河南安陽）、因心（許昌）、孔弗之（彰德）
山東	佟公超（山東）、王霽虹（済南）、賈卓爾（済南）、保全（済南）、非博士（済南）、忌庭（済南）、孟言信（済寧）、招司（膠済？）、王履箴（青島）、包文翊（青島）、葉伯訓（青島）、龍劫（青島）、張小雨（棗莊）、
湖北	<u>秦兆陽</u> （黄冈）、馮自立（漢口）、馮鷹（漢口）、陸金城（漢口）、 <u>秦兆陽</u> （漢口）、 <u>秦兆陽</u> （武昌）
湖南	黎任于（長沙）
江蘇	蘇州： <u>陳涓隱</u> 、沈冠芬、許超然、陶謀基、許超然、楊紹万、葉川、李排 南京：戴廉、高龍生、沈鉄如、陸志痒、碧淨、龍学綸、 <u>孔嘉</u> 、王之亭 <u>陳涓隱</u> （呉県）、金夫（呉県）、許若明（呉県）、郭榮俊（無錫）、謝文（無錫）、譚寄？（鎮江）、雷迅（鎮江）、姚兮靈（鎮江）、鄧作雲（鎮江）、張文元（清江浦）、陳惠齡（清江浦）、楊影湖（如皋）、達才（如皋）、田正（南通）、穆穆（江都）
浙江	杭州：張曉紫、丁深、向發英、胡同光、光德、童話、江浪、陳變元、黄崇、張鹿山、江郎、麦緑之、張鹿山、張之芳 寧波：傅其康、王立鈞、陳孝祚、冠君、陳冠南、周錦泉 張運鑒（紹興）、徐俊文（諸暨）、汪少源（諸暨）、陳振龍（温州）、薛適樓（温州）、史麗（呉興）、申屠政（桐廬）、羅文奎（石浦）、增破（平湖）
福建	趙肅篁（福州）、江則民（福州）、丙宣（漳州）、麟華（漳州）、廖華峰（江晉）、白丁（廈門）、学光（廈門）、翁戈丹（廈門）
広東	広州：廖冰兄、陳湃沂、陳超平、黄復生、黄志超、林檎、謝貝、紀業候、胡丹、沈文、非子、梁永漢、黄幻鳥、麦子、梁永雄、余永鵬、黄偉強、黄比得、麦春光、紀伯銘、陳巴、陸地、黄環馬介（台山）、馬介如（台山）、老紀（佛山）、金沫（佛山）、馬浪（平定）、李豊（広東）
香港	梁清、林浪民、張乃煥、余所亜、林炎、楊□華、劉宿全、欧陽礼、陳浩明、何漫兒
四川	文石（四川）、劉刃（成都）、張国土（成都）、梁正宇（成都）、車輻（成都）、張漾兮（成都）
重慶	蔡輪丹
江西	沈影（南昌）
広西	張在民（南寧）、黄鐘（南寧）、夏啊鼎（梧州）、李德純（梧州）
甘肅	李宝（蘭州）、宋熒仙（蘭州）、鄭扶平蘭金聲（安西）
国外	藍蔚邦（神戸）、羅六（神戸）、三三郎（神戸）、 <u>余天漢</u> （ペナン）、 <u>余天漢</u> （シンガポール）、鄭光漢（シンガポール）

表二をざっと見てみただけでも、北は包頭から南はシンガポールまで、実に様々な地域に投稿者がいたことが分かる。ここで、5名以上投稿があった地域を上位から列挙してみると、天津（33名）、広州（23名）、北平（17名）、杭州（14名）、香港（10名）、蘇州（8名）、南京（8名）、寧波（6名）、済南（5名）となる。『時代漫画』では、こうした各地からの投稿に目をつけ、それぞれの土地の風景や人々を描いたスケッチを掲載することもあった³⁷⁾。

それでは、上海以外の場所の投稿者から見て、『時代漫画』は、どのような位置づけにあったのだろうか。本稿では、最も人数の多かった天津の状況を調べてみて、どのような関係があるのかを確認してみよう。

先ほど取り上げた天津のグラフ雑誌、『北洋画報』の刊行期11年間すべてを範囲に、索引などを参照し、「漫画」、「素描」、「速写」に当てはまる作品を書いた人物を集計してみると、三名の人物が浮かび上がってくる。その人物とは、曹涵美、童漪珊、孫之雋である。彼らは『北洋画報』において、他の画家と比べて圧倒的に多く作品を発表しており、なおかつ『時代漫画』にも作品を発表している。

曹涵美（1902～1975）は無錫出身で、張光宇、張正宇ら三兄弟の次男として知られる人物である。彼は1920年代末には『上海漫画』にも作品を発表すると同時に、『北洋画報』1927年1月1日から1929年10月31日まで、計116作の作品を残している。しかしながら、1930年代には『北洋画報』には投稿しておらず、『時代漫画』で「金瓶梅」、『漫画界』で「春梅」、『独立漫画』と『上海漫画（独立出版社版）』では「李瓶兒」の挿絵を制作している。

一方の童漪珊は当時の天津、孫之雋は北平における画家の注目株である。童漪珊は天津出身で、『北洋画報』に計113作、『時代漫画』に計5作を制作している。1934年に「天津漫画会」を設立し、天津の新聞『庸報』の副刊「每周漫画」の編集を手がけた。孫之雋（1907～1966）は河北出身で、『北洋画報』に計70作、『時代漫画』に計6作を制作している。彼は主に北平を拠点に活躍しており、1928年に「五三漫画会」、1930年「北平漫画社」を設立している³⁸⁾。

注意したいのは、1930年代の中国において、北平、天津の画家が『時代漫画』に投稿することが多いのに対して、上海の画家が『北洋画報』に投稿するケースが極めて少ないことである。例えば、曹涵美は1920年代には『北洋画報』に作品を発表していたものの、1930年代にはまったく投稿を行っていない。その一方で、童漪珊や孫之雋ら『北洋画報』で活躍する人々はもちろん、その他の地域の画家も『時代漫画』に投稿するケースが非常に多いことは無視できない。こうした事態から伺えるのは、彼ら各地の画家が『時代漫画』の目指す「漫画」に、新しい可能性を見出していたことではないだろうか。

以上のように、『時代漫画』は1934年以降、一方で若手、中堅の画家の絵、その一方では中国各地の画家たちの絵を、ともに「漫画」の名の下で発表していた。こうした『時代漫画』における試みは、「漫画家」や「漫画」の知名度を、中国各地に広める役割を果たしていたように考えられる。

四、「漫画家」たちの誕生

最後に、『時代漫画』の試みが、当時の中国において、どのような影響を及ぼしていたのか、検討しておきたい。

まず指摘しておきたいのは、『時代漫画』が1936年、「全国漫画展覧会」という展覧会の開催にこぎつけていたことである。この「全国漫画展覧会」は『上海漫画（独立出版社版）』と合同で開催するもので、「漫画」の名を冠する展覧会としては、当時において最も大規模なものであった³⁹⁾。しかも、『時代漫画』は、この展覧会の開催にあたって、上海を中心としつつ、中国各地、時には国外の漫画家と連携を計ろうとしていたことも重要である。

表三『「全国漫画展覧会」（1936年）準備委員と所在地』に、『時代漫画』の広告に掲載されている準備委員31名の名前と、分かる限りの所在地を記している⁴⁰⁾。「全国漫画展覧会」は中国全土を対象とした巡回展であり、中国各地に「漫画」を理解する人々がいないければ、実現し得ないものであった。

表三 「全国漫画展覧会」（1936年）準備委員と所在地

地域	名前
上海	蔡若虹、華君武、万籟鳴、豊子愷、黄苗子、陸志痒、魯少飛、張光宇、張正宇、張大任、張樂平、胡考、古巴、王敦慶、張英超、汪子美、黄堯、盛公木（特偉）
天津	宝宗洛、宝宗淦、趙望雲、高龍生
南京	葉浅予、梁白波
北平	王君異、孫之儁
広州	廖冰兄、紀業候
蘇州	陳涓隱
日本	郭建英
南洋	鄭光漢

表三にあるように、準備委員の所在地については、上海（18名）、天津（4名）、南京（2名）、北平（2名）、広州（2名）、蘇州（1名）、日本（1名）、南洋（1名）と、多くの準備委員が、様々な地域に点在していることが分かる。巡回展の開催に当たって、このように各地の画家と連携を取ることができたのは、『時代漫画』が、すでに「漫画家」、「漫画」の中心地と見なされていたからであろう。

もう一つ指摘しておきたいのは、当時の他の雑誌も、新しい芸術家としての「漫画家」に注目し始めていたことである。例えば、当時の中国において、最も多くの発行部数を誇ったグラフ雑誌『良友』（1926～1945）も、『時代漫画』で活躍する「漫画家」たちに関心を示し始めている。『良友』はグラフ雑誌としての性格から、1920年代の創刊当初から漫画的な絵を積極

的に掲載しているものの、「漫画家」や「漫画」を体系的に紹介しようとはしていなかった。しかしながら、無視できないのは、1936年頃から少しずつ状況が変わり始めていることである。

例えば、この時期の『良友』を確認してみると、1936年11月の第121期において、黄苗子が「漫画を論ず」というエッセイで海外の漫画家とともに、葉浅予、魯少飛、張光宇を「漫画家」として紹介している⁴¹⁾。中でも、黄苗子は、葉浅予の「王先生」シリーズをウォルト・ディズニーの「ミッキーマウス」と並べて論じており、特に高く評価しようとしている。さらに、同年12月の『良友』第121期もまた、「全国漫画展覧会」に関する特集ページを設けて、張文元、魯少飛、江則民、葉浅予、孫之儔、黄堯、江牧、張光宇、陳涓隱、胡考、劉一、張正宇、夏緑之、曹涵美の作品を掲載している⁴²⁾。この時期の『良友』の記事から分かるのは、1930年中頃において、『時代漫画』をめぐる画家たちが、徐々に「漫画家」として世に出始めていたことではないか。

以上からうかがえるのは、1936年頃には、『時代漫画』を中心として、中国において芸術家としての「漫画家」という存在が誕生していたことである。『時代漫画』と『上海漫画（独立出版社版）』の開催した巡回展「全国漫画展覧会」では、実際に様々な地域の画家たちが呼応したり、『良友』のような有力誌の注目を集めたりしていた。こうした状況の下で、黄苗子の「漫画を論ず」にもあったように、葉浅予の描く絵もまた、芸術家の絵として、自律的な価値が見出されていくわけである。1930年代中頃の中国において、葉浅予は、新しい芸術「漫画」の担い手、「漫画家」の代表人物として誕生していたのである。

おわりに

本稿では、1930年代中頃における葉浅予の行動を軸に、中国における「漫画家」の描く絵に、なぜ、いかにして価値が見出されたのかを考察してきた。

本稿で明らかにしたことの一つは、葉浅予自身が1930年代中頃において、自らを一人の画家として強く自覚することで、スケッチに関心を示し、制作を続けていたという事実である。確かに、彼自身は中国画や西洋画の専門教育を受けておらず、またスケッチの基礎訓練も受けていない。しかしながら、「王先生」シリーズの成功、邵洵美の理論的、金銭的な支持、それに批評家の高評価を得て、画家としての強い自負を抱くにいたっていく。しかも、そうした葉浅予の個人的な体験と関連していたのが、1930年代中頃の中国各地において、彼のような「漫画家」を芸術家と見なす人々が増加していたことであった。

もう一つ明らかにしたのは、当時における代表的な漫画雑誌、『時代漫画』が、その芸術家としての「漫画家」という存在を、生み出していたことである。『時代漫画』は、従来の「漫画会」のメンバーだけではなく、若手、中堅画家を取り込んだり、諸都市の画家の投稿を積極的に受け付けたりすることで、「漫画」の名の下で多様な画家の作品を掲載していた。こうし

た試みは、1936年の「全国漫画展覧会」のように、中国全土にわたる巡回展の開催へとつながっていく。中国では、『時代漫画』の様々な試みを通じて、新しい時代の芸術家としての「漫画家」が登場していたのである。

はじめに述べたように、今日の中国漫画史、中国美術史は、葉浅予のスケッチを代表例として、「漫画家」の描く絵そのものに高い評価を与えてきた。しかしながら、中国における「漫画家」がいかなる存在なのか、他の画家と何が異なるのかについて、今日ではいまだ明らかになっていないと言いがたい。なぜ、葉浅予は、これほどまで多くのスケッチを残し、その可能性を探ったのか。なぜ多くの批評家、研究者は、彼のような「漫画家」の描く絵に、芸術的な可能性を見出したのか。葉浅予のスケッチを再評価することは中国の「漫画」を考える上で、なくてはならない作業となることであろう。

1930年代中頃の葉浅予、それに『時代漫画』は、中国における「漫画家」、「漫画」の成り立ちを探る上で、格好の題材を与えてくれるのである。

注

- 1) 本稿における「漫画」をめぐる問題設定については、拙稿「広告、一コマ漫画、ファッションデザイン——1920年代中頃の葉浅予の『漫画』について」（『現代中国』第87号、2013年）を参照されたい。なお、今日の中国語では、スケッチを主に「速写」と呼ぶ。
- 2) 中野美代子、武田雅哉編訳『世紀末中国のかわら版——絵入新聞『点石斎画報』の世界』（中公文庫、1999年）、参照。
- 3) 「漫画会之成立」（『三日画報』第153期、1926年12月8日）によると、成立当初の「漫画会」のメンバーは丁悚、王敦慶、胡旭光、張光宇、張振宇（張正宇）、黃文農、葉浅予、魯少飛の8名である。他、「漫画会宣言」（『三日画報』第157期、1926年12月20日）も参照。
- 4) 畢克官、黃遠林『中国漫画史』（文化芸術出版社、1986年、初出。文化芸術出版社、2006年、改訂版）では、「漫画速写」という言葉で、葉浅予のスケッチを評価している。
- 5) 葉浅予は20世紀の中国美術界において、スケッチの指導的役割も果たしていた。例えば、彼の回想録については、謝春彦編『葉浅予談速写』（上海人民美術出版社、2007年）が読みやすい。
- 6) 李路明「二十世紀中国速写」『中国現代美術全集——速写』湖南省美術出版社、1998年、9頁。
- 7) 『時代漫画』については、2014年、浙江人民美術出版社から影印本が出て、研究がしやすくなった。他にも、『生活月刊』編『時代漫画——被時代塵封的1930年代中国想像力』（広西師範大学出版社、2015年）は、『時代漫画』の全貌を掴むにあたって有用なテキストが収録されている。
- 8) 拙稿「上海人から中国人へ——『時代』版「王先生」について」（『季刊中国』第120号、2015年、参照）。
- 9) 『時代漫画』では第9期から第15期（1934年9月20日～1935年3月20日）と、第38期（1937年5月20日）の計8作の「王先生」を見ることができる。
- 10) 『独立漫画』では第1期から第5期まで（1935年9月25日～11月25日）、「小陳」のタイトルで計5回を見ることができる。
- 11) 例えば、葉浅予「王先生」（『時代漫画』第9期、1934年9月20日）が典型的である。
- 12) 黄堯「王小二的故事」（『時代漫画』第14期、1935年2月20日）。
- 13) 葉浅予「如此而謂不得已者其誰信乎」（『時代漫画』第15期、1935年3月20日）。
- 14) 龔吉凡「王先生文壇觀光記」（『時代漫画』第16期～第17期、1935年4月20日～5月20日）。
- 15) 映画版「王先生」は、1934年に天一影片公司から「王先生」が公開されたあと、1935年には新時代影片公司から「王先生的秘密」、「王先生過年」、「王先生到農村去」の三作が公開されている。饒曙光『中国喜劇電影史』（中国电影出版社、2005年）の「湯潔の王先生喜劇系列以及李阿毛系列」も参照。

- 16) 確認できる限り、「古城拊掌集」(『時代漫画』第18期、1935年6月20日)、「葉浅予作於南京——新都閨情」(『時代漫画』第21期、1935年9月20日)、「葉浅予作於天津——食色的一群」(『時代漫画』第25期、1936年1月20日)。「北平古趣」(『良友』第107期、1935年7月15日)、「北平民閨情——葉浅予芸術行脚報告之一」(『時代』第8巻第1期、1935年)、「老年的中国——介紹浅予速写集」(『上海漫画』第5期、1936年9月15日)がある。
- 17) 『汗血週刊』は汗血書店から、1933年7月10日から1937年6月19日(第8巻第25期)まで刊行された雑誌である。編集は汗血週刊社。なお、葉浅予は、自伝『細叙滄桑記流年』(群言出版社、1992年、初出。中国社会科学院出版社、2005年)において、『汗血月刊』にて「旅行漫画」を連載したと述べている。しかしながら、管見の限り、『汗血月刊』には「旅行漫画」は見当たらず、『汗血週刊』での連載を確認することができた。
- 18) 葉浅予「自序」『旅行漫画』上海雜誌公司、1936年。
- 19) 葉浅予は、回想録でも、コバルピアスからの影響を公言している。葉浅予『細叙滄桑記流年』(前掲)参照。
- 20) この時期の邵洵美と時代図書公司、それに「漫画」とのかかわりについては、拙稿「上海人から中国人へ——『時代』版「王先生」について」(前掲)を参照されたい。
- 21) 邵洵美の娘、邵納紅の回想録『我的爸爸邵洵美』(上海書店、2005年)でも、邵洵美らとミゲル・コバルピアスの交流を読むことができる。
- 22) 張竹「中国漫画の奠基者——張光宇」(『中国漫画書系・張光宇卷』河北教育出版社、1994年、初出。唐薇、黃大剛編『瞻望張光宇——回憶与研究』人民美術出版社、2012年、収録)、吳宜鈴「試析1930年代上海情歌漫画——以張光宇(1900～1965)《民間情歌》為例」(『書畫藝術學刊』第14期、2013年)、参照。
- 23) 彼らは上海を去った後、インドネシアのバリ島へ向かい、1937年に *Island of Bali* という旅行記を刊行することとなる。ミゲル・コバルピアス著、関本紀美子訳『バリ島』(平凡社、1991年)も参照。
- 24) 邵洵美「珂佛羅皮斯」『十日談』第8期、1933年、6～7頁。なお、エッセイによると、邵洵美はエミリー・ハーン(1905～1997)の紹介で、コバルピアス夫妻と出会ったという。
- 25) 邵洵美「珂佛羅皮斯及其夫人」『時代』第5巻第4期、1933年、ページ表記なし。
- 26) 邵洵美「珂佛羅皮斯及其夫人」『時代』第5巻第4期、1933年。なお、ディエゴ・リベラ(1886～1957)とは、メキシコ壁画運動の中心人物である。メキシコ壁画運動については、当時の「漫画家」たちも受容しており、例えば張光宇は1932年、上海の国際大飯店に「龍女」という壁画を制作していたという。袁運甫「試論中国現代壁画藝術的源流与發展」『中国現代美術全集——壁画』(遼寧美術出版社、1997年)、参照。
- 27) 『北洋画報』は1926年7月7日から1937年の7月29日まで、三日ごとに刊行されていた。11年間で全1587期。創刊当初の発行者は馮武越、譚北林、編集長は呉秋塵であった。陳艷『北洋画報研究』(百花文芸出版社、2012年)、参照。
- 28) 秋塵「漫画家葉浅予停車津門記」(『北洋画報』第1234期、1935年4月23日、2頁)、無「北平宴葉宗小記」(『北洋画報』第1237期、1935年4月30日、2頁)、曉生「葉浅予旅平近況」(『北洋画報』第1244期、1935年5月16日、2頁)、L「訪葉記」(『北洋画報』第1252期、1935年6月5日、2頁)。
- 29) 当時の新聞記事を見る限り、魯少飛の絵の評価は高かったらしい。例えば、敬思「晨光美術会第四屆展覽會預誌」(『申報』1925年7月30日、本埠増刊、1頁)には、「至魯少飛君之旅京奉写生約七十餘件、北地風光、怪怪奇奇、不名一狀、尤為可觀云」という記述が見える。また、「晨光美術會展覽開幕」(『申報』1925年8月2日、9頁)に「戲劇協社洪深君會見魯少飛旅奉写生、其為嘆美、擬為著文学小品、俾將少飛君所作印入」とあるように、洪深が自身の単行本に、魯少飛の挿絵を求める記述も見える。
- 30) 葉浅予が1935年の『北洋画報』に発表したスケッチは次の通りである。「巴黎舞場印象記」(第1243期、5月14日)、「葉浅予為薩空了速写」(第1252期、6月4日)、「葉浅予在本市中華落子館速写」(第1253期、6月6日)、「葉浅予為画家王卓速写」(第1259期、6月20日)、「漫画家葉浅予為画家蘇吉亨速写」(第1274期、7月25日)。
- 31) 『時代漫画』、『漫画界』、『上海漫画(独立出版社版)』については、姜亜沙、経莉、陳湛綺編『民国漫画期刊集粹』(全国図書館文献縮微複製中心、2004年)に収録されている。なお、この三誌は資料の都合上、カラーページがどのような状態だったのかは分からない。
- 32) 1930年代中国における雑誌刊行ブームについては、拙著『中国モダニズム文学の世界——1920、30年

- 代上海のリアリティ』(勉誠出版、2014年)において、文学の角度から分析を進めた。
- 33) 1920、30年代の漫画家と作品については、謝其章『漫画漫話』(新星出版社、2006年)や、甘陰峰『中国漫画史』(山東人民出版社、2008年)、参照。
- 34) 「三毛」シリーズについては近年、加部勇一郎が「流浪する少年——国民的キャラクター“三毛”を読む」(『連環画研究』第4号、2015年)で再評価を進めている。
- 35) 「冷紅書画会」とは1926年、蘇州で誕生した中国画のグループで、上海とも強いつながりがあったらしい。張継馨、戴雲亮著『百年墨影——二十世紀蘇州美術』(蘇州古吳軒出版社、2014年)、参照。
- 36) 『時代漫画』では「魯少飛葉淺予王敦慶面授漫畫」(『時代漫画』第18期、1935年6月20日)として、「漫画」制作教授に関する告知を出している。なお、当時の若手画家と、魯少飛ら「漫画会」の様子については、華君武が「近代上海是我正反兩方面的教員」(『華君武集』3「漫画漫話(上冊)」、河北教育出版社、2003年)において回想している。
- 37) 例えば、第32期の「綏蒙風雲漫画專号」(1936年11月20日)や、第33期の「旅行漫画附輯」(1936年12月30日)がそのよい例であろう。
- 38) 孫之儁については、近年、南雲大悟「『北京漫画』研究——孫之儁の作品について」(『千葉大学人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書』第219集、2011年)、同「『北京漫画』の日本表象とその暗示」(『千葉大学人文社会科学部研究科研究プロジェクト報告書』第250集、2012年)において、1940年代の『北京漫画』に見える作品を考察している。
- 39) 比較的早い時期の漫画史、黄茅の『漫画芸術講話』(商務印書館、1943年)によると、1936年11月に上海の大新公司以展覧会を行った後、12月に南京、翌年1937年1月に蘇州、6月に杭州で展覧会が行われたという。しかしながら、日中戦争が始まると、江西省のある県で日本軍の空襲にあって、作品が灰燼と化してしまったらしい。
- 40) 「時代上海漫画主辦：全国漫画展覧会徵求作品」『時代漫画』第27期1936年6月20日。
- 41) 黄苗子「論漫画」『良友』第121期、1936年11月。海外の漫画家としては、オノレ・ドーミエ、オートー・ソグロー、ミゲル・コバルビアス、ウィリアム・グロッパ、ジョージ・グロス、ウォルト・ディズニーを挙げている。
- 42) 「全国漫画展覧会選刊」『良友』第122期、1936年12月。

(後記)

国際地域研究所のプロジェクト研究会「中国語圏地域人文学会」の目的は、「中国の人文領域における様々な研究営為と「対話」しつつ、中国的「近代」(“中国現代性”)をめぐる問題の探究を進めることを通じて、日中両国の「近代」における来歴の中で膠着した問題群を解きほぐし、相互理解を深め合う契機としていくこと」にあり、特に、2016年度は、「中国の「伝統文化」が、いわゆる「近代化」とどのように関係し変容していったのか、あるいは「近代化」が「伝統文化」を逆に強化するという状況や、「近代化」と「伝統文化」が並行して存在していたことなど」を探る研究営為を、主要テーマの1つに掲げてきました。

城山拓也氏の論文は、1930年代中期の中国(特にモダニズム都市・上海)における葉浅予(1907～95年)の創作活動と、当時を代表する漫画雑誌『時代漫画』(1934～37年)に焦点を当てながら、芸術家とみなされる側面が存在する当時の「漫画家」の姿を浮き彫りにすることを通じて、都市文化における中国的「近代」の一側面を明らかにしようとする試みであり、プロジェクト研究会の研究活動の一環であることを、論文掲載に際して申し添えておきます。

国際地域研究所「中国語圏地域人文学会」代表

立命館大学文学部教授 宇野木 洋